

日向国延岡藩内藤充真院の大樹寺参拝

神 崎 直 美

はじめに

本稿は、延岡藩主内藤政順まさよりの夫人であった充姫みづひめ、後の充真院に関する研究の一端として、充真院が三河国額田郡の大樹寺みづのゐ（現、愛知県岡崎市）を参拝したことについて明らかにする。

大樹寺は徳川將軍家と所縁のある寺院である。開基は松平親忠で、松平氏八代と徳川家康から十四代將軍家茂らの位牌が安置されている。將軍十四人の位牌の長さが將軍の身長と同じであることが知られている¹⁾。

徳川家はその所縁により大樹寺を厚く庇護し、三代將軍徳川家光の命令により大伽藍が大造営された。その後、安政二年（一八五五）一月二十六日に失火で本堂や書院をはじめとする多くの建物が焼失したが、同三年（一八五六）に幕府が再建を決定した。再建の折に総建坪は全体で二割減となったが、同四年（一八五七）閏五月

に建物が竣工した²⁾。

充真院が大樹寺を訪れたのは、慶応元年（一八六五・四月七日に元治二年から改元）の五月二日である。充真院にとって二度目となる転居のための大旅行の途中であり、延岡から江戸へ向かっていた。参拝当時、充真院は六十六歳である。なお、充真院は安政の大災から再建した八年後の大樹寺を参詣したのである。

大樹寺参拝について、充真院は日記体の紀行文『海陸返り咲こと葉の手拍子』³⁾にその様子を詳しく書きとめた。大樹寺参拝は当初から計画されていたのではない。思いがけない成り行きがきっかけであった。東海道を西に進んでいる公家衆が岡崎の二つ東に位置する宿場の赤坂まで来ていた。岡崎の西本陣に到着していた充真院一行はその情報を知り、遠慮して急遽、宿を明け渡すことにした。そして、公家衆が岡崎を通り過ぎるまでの間、充真院らは鴨田村井田野の西光寺に移動して滞在しながら、その本山で近隣にある大樹寺を参拝することにしたのである。

突然、決まった参拝であるが、岡崎は内藤家の先祖らが居住していた所縁の地である。定宿としている西本陣をはじめ西光寺、大樹寺、さらにその塔頭である信楽院しんきやういんは、内藤家の先祖らと所縁があった。

ところで、充真院が大樹寺を参拝した翌月の閏五月九日に十四代將軍徳川家茂が大樹寺を参拝した⁽⁴⁾。家茂が第二次長州征伐の為、大坂城に向かう途中のことである。家茂の参拝は現職の將軍として最初で最後の大樹寺参拝となった。

右の様子から、充真院の大樹寺参拝は世相が緊迫していた時期であったことがわかる。その二年後の慶応三年（一八六七）十月に大政奉還を経て徳川幕府が瓦解すると、徳川家の菩提寺である大樹寺は大檀那を失った。しかも明治四年（一八七二）一月に上地令が発令されて寺領を失い、塔頭を廢寺にせざるを得なくなった。明治六年（一八七三）には、かつての寺域の南半分である惣門と山門の間の地に建っていた塔頭を手放した跡地に、広元学校（現、大樹寺小学校）が開設され、寺域が様変わりしてしまった⁽⁵⁾。充真院の大樹寺参拝はその八年前であった。したがって、充真院の大樹寺参拝は、火災による建造物の減少を経ていたものの、当寺が寺域の規模を保っていた最終期の貴重な見聞と位置づけられるのである。

(1) 大樹寺については『新編岡崎市史 近世三』（新編岡崎市史編集委員会、平成四年）や『大樹寺の歴史』（発行・浄土宗成道山松安院大

樹寺、改訂版平成二十六年）に詳しい。將軍の位牌については、『大

樹寺の歴史』の六一〜三頁、一〇〇〜二頁に記載がある。なお、これらの位牌はかつて御霊屋に安置されていたが、現在は位牌堂に安置されている。

(2) 三代將軍徳川家光による大造営については『新編岡崎市史 近世三』の一二五〜六頁や『大樹寺の歴史』五四〜八頁、『大樹寺文書』上、岡崎市史料叢書（岡崎市史料叢書編集委員会、平成二十六年）解説の二五頁に掲載されている。安政の火災と再建については『新編岡崎市史 近世三』の一〇五〜七頁や『大樹寺の歴史』の七四〜八四頁、『大樹寺文書』上の解説二八〜九頁による。

(3) 『海陸返り咲こと葉の手拍子』は、明治大学博物館所蔵内藤家文書内藤政道氏寄贈書の一冊で、架号は（二）充真院（繁子）関係（一）の一三である。翻刻本としては、『内藤充真院道中記』（宮崎県立図書館、平成六年）と『内藤家文書増補・追加目録八 延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』（明治大学博物館、平成十六年）がある。本稿でこの紀行文及び、同じく充真院の紀行文『五十三次ねむりの合の手』を引用する際には、『明大翻刻本』と略記して該当頁を記す。

(4) 家茂の大樹寺参拝については『新編岡崎市史 近世三』の一三八三頁や『大樹寺の歴史』八九〜九二頁、『大樹寺文書』上の解説二九頁に詳しい。なお、家茂の参拝は『新訂増補国史大系 続徳川実紀 第四篇』の六九六〜七頁に記載がある。

(5) 幕府の瓦解、および明治の幕開けによる大樹寺の失墜については、『新編岡崎市史 近世三』の一四七〇〜二頁、『大樹寺文書』上の解説二九頁による。

一 岡崎と内藤家、及び西本陣中根家について

元治二年（一八六五）三月十五日に延岡を發った充真院一行が、海路を経て東海道を下り東海道の岡崎の宿である西本陣中根甚太郎

に到着したのは、旅の十六日目の慶応元年四月三十日である。

まず、岡崎と内藤家の所縁について少し振り返っておこう。かつて内藤家が、後に徳川家となる松平家の配下の一人——後に上級譜代家臣として位地づけられる——として活躍していた頃の拠点の一つが、この三河国額田郡菅生郷（現、愛知県岡崎市）なのである。¹⁾

内藤家の系譜をひもとくと、古くは丹波国の出であるが、後に三河国に居を構えたという。公的な系譜では初出の先祖は内藤義清である。²⁾ 義清は徳川家康の曾祖父である松平信忠、祖父の清康に仕えた。清康の家臣の中で武芸に優れた岡崎五人衆の一人が、この義清である。³⁾ 義清夫妻は没後に西光寺に葬られた。内藤家の「再選系譜」「再選御系譜」によると、義清の墓碑には法号「義芳禪定門」と没年月日の「天文六丁酉年十二月十六日」、夫人の墓碑には「啓善女内藤室」とのみ刻まれているという。⁴⁾ なお、右の系譜には「大樹寺塔頭信楽院有位牌」と、大樹寺の塔頭である信楽院に位牌があると記録がある。⁵⁾

西光寺が元禄七年（一六九四）六月に作成した檀家の命日をまとめた「過現名帳」には、十一日の箇所に「天文十九戊 六月 悦窓啓善法女 内藤右京進奥方」、十六日には「天文六丁酉十二月十六日 春山善芳禪定門 内藤右京進」と記してある。⁶⁾

さらに義清夫妻については、かつて大樹寺の過去帳にも記載があった。義清は「春山善芳男 十二月十六日 内藤右京進」である。夫人は「天文十九年戌年六月一日 悦窓啓善女内藤右京進

内」と没年月日も記されていた。さらに大樹寺塔頭の信楽院が位牌をお祀りし、大樹寺との所縁も深い。⁷⁾

なお、義清の父・重清と義清の嫡子清長は、当家のもう一つの拠点である同国碧海郡桜井（現、安城市）の誓願寺に墓所があり、この付近を居所としていたが、⁸⁾ 清長の次代である家長の居所は、岡崎城のすぐ近隣北側の地である。内藤家は家長が当主の天正十八年（一五九〇）に、徳川家康の関東移封に伴い、上総国天羽郡佐貫（現、千葉県富津市）に移り、加増されて二万石の大名に取り立てられるまで、三河の地を拠点としていた。⁹⁾

次に、西本陣の中根甚太郎家についてである。西本陣中根甚太郎は、かつての岡崎城主田中吉政が城下の防衛のために東海道に屈折を多く施した、いわゆる二十七曲り沿いにある。宿の位置を図1「東海道岡崎宿家並図」で示しておこう。当本陣は岡崎宿役町一カ町の中でも戸数や規模が大きい伝馬町に位置していた。文政九年（一八二六）に作成された「伝馬町家順間口書」によると、当本陣はこの二十七曲りの角の一つに位置し、間口は南側を向いていること、さらに間口が十二間あることがわかる。三間、四間、五間などの間口の家が多いなかで、本陣ゆえにとりわけ広い間口である。図2は作成年代は不明であるが、中根家の屋敷図である。図3は図2の玄関部分である。広々とした屋敷地には、本陣ならではの立派な玄関と部屋数の多い立派な建物があった。中根家は当地で本陣を営んだ家の中でも正徳三年（一七一三）の「伝馬役図」にも記されて

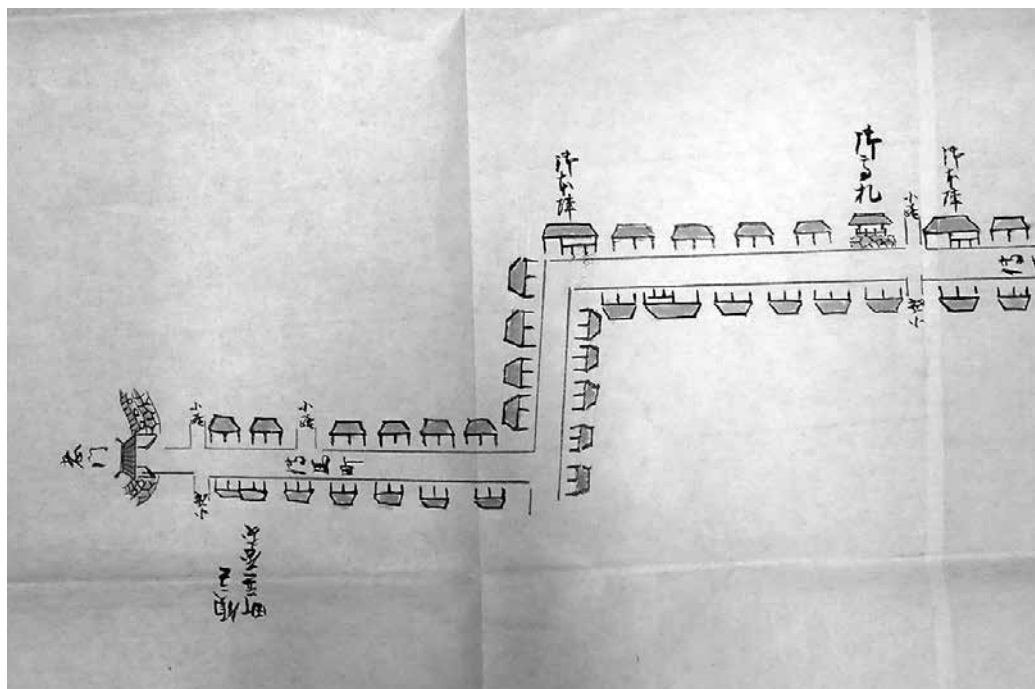


図1 西本陣中根基太郎家の位置 (写真中央部の本陣)

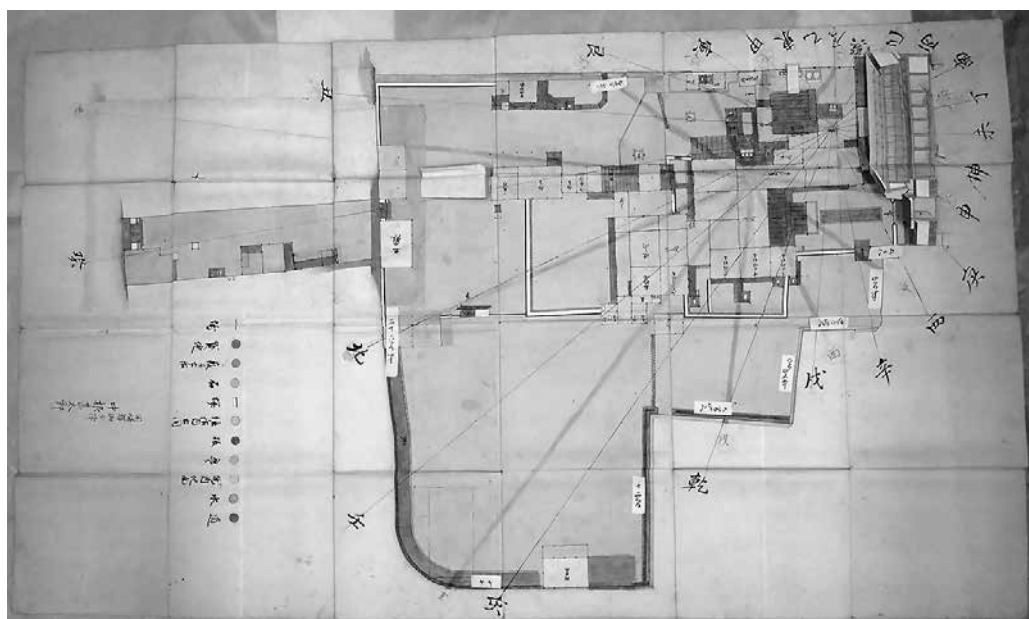


図2 西本陣中根基太郎家屋敷図

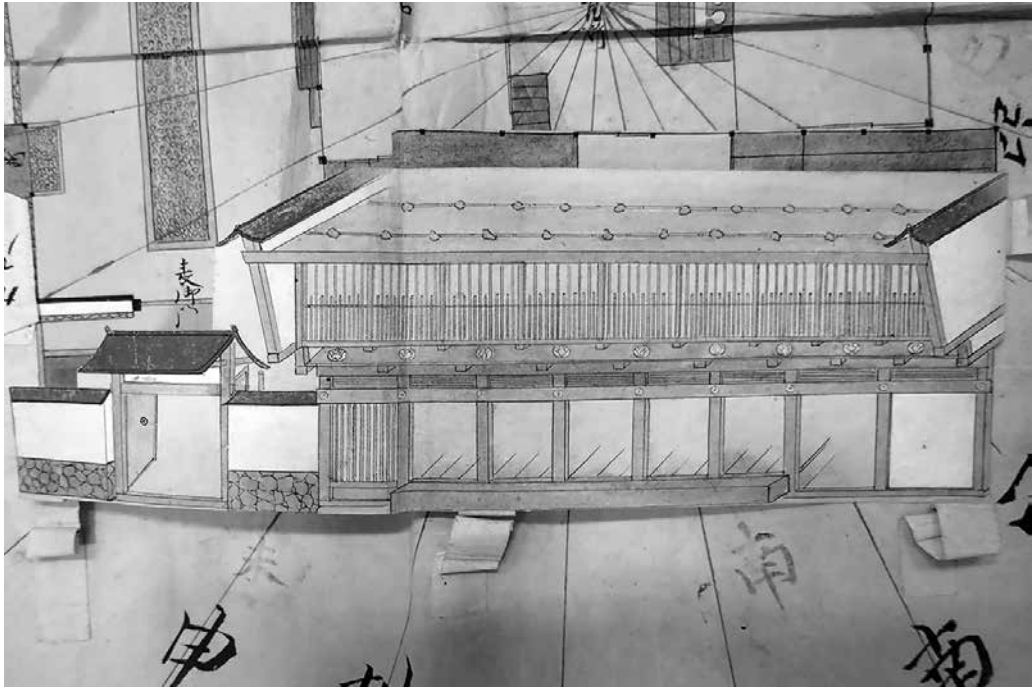


図3 西本陣中根甚太郎家玄関

おり、古くからその存在が確認できる。近世後期に苗字帯刀を許されていたことも確認でき、岡崎宿の中で格別な立場の家である。¹⁵⁾

ここで、内藤家と中根家の関係についてふれておこう。実は内藤家が当地を拠点としていた頃、後の岡崎の西本陣中根家と主従関係、さらには血縁関係があった。内藤家の「再選系譜」「再選御系譜」に、「当時参州岡崎本陣中根甚太郎、往昔中根家者、信康君御付属之輩ニテ、家長ニ預賜フ、三十人之内也」と、中根家は徳川家康の長男信康の配下であり、後に内藤家長付となった三十人の武士のうちの一人であったと記してある。しかも、家長の妹について「女 中根甚左衛門正恭妻」と記してある。家長の妹が中根家に嫁いでいたのである。¹⁶⁾

西本陣は近世後期に屋号、及び当主を中根甚太郎と称した。家長の妹が嫁いだ中根正恭は甚太郎、甚左衛門とも称した。なお、中根家の系譜である「中根氏大系図」によると、正恭の箇所「妻内藤弥次右衛門尉藤原清長女」とある。¹⁷⁾内藤清長とは家長の父である。内藤清長の女、すなわち娘とは家長の妹である。

中根家のうち一家はその後も当地に残って庶民となり、岡崎の西本陣を営んだ。内藤家は藩主が参勤交代で東海道を通過する際に、岡崎では当家に宿泊している。充真院も文久三年（一八六三）の江戸から延岡への転居の旅の途中に本陣として中根家に宿泊しており、慶応元年の宿泊は二度目であった。なお、当時岡崎の地は東海道の宿場町として賑わい、大名の本多忠民（五万石、譜代）の城下

町であった。⁽¹⁸⁾

両家の古い血縁については、文久三年に充真院がしたためた紀行文『五十三次ねむりの合の手』に、「昔は此家にはゆいしよ有とて丁寧にとりあつかふ」とあり、さらに元治二年の紀行文『海陸返り咲こと葉の手拍子』にも「此宿はむかしゆい所有とて」と記してある。⁽¹⁷⁾まさしく内藤家と中根家の血縁関係を表しているのである。そして、充真院もそのことを十分に認識していたのである。

『五十三次ねむりの合の手』には、文久三年の旅で当家の幼女が挨拶に出てきて茶菓を充真院に運んできたこと、そして充真院の側を離れようとしなかったことなどが記されていた。充真院がこの幼女に慕われたことは、旅ならではのほのぼのとした庶民の子供との交流的一幕であった。古きに結ばれた両家の血縁関係ゆえに、中根家は身分制社会としての上下関係の礼を尽くしながらも、幼女をも含めた家族ぐるみの、親しみを感じるもてなしをしたのではなからうか。

中根家は宿泊以外にも、内藤家に貢献している。それは、内藤家と所縁のある当地の寺院に関する事務である。内藤家からの要請で、文化元年（一八〇四）から同六年（一八〇九）にこの地にある内藤家所縁の寺院を調査している。この頃、内藤家は当地の寺院と疎遠となっており、不明な点が生じたので、内藤家の御用部屋から中根家に依頼して問い合わせをして調査したのである。その調査の書類は、一連の資料として「御先祖様御廟所三州引合一件帳」と名

付けられ、冊子二冊と書状六点の都合八点が一件袋にまとめられて現存している。⁽¹⁸⁾

この調査を契機として、その後、三河国にある菩提寺への御仏供料納入をはじめとする事務を中根家が仲介している。⁽¹⁹⁾内藤家所縁の三河国の寺とは、西光寺、誓願寺の他に、大樹寺及びその塔頭の信楽院である。前述したように、信楽院には義清の位牌をお祀りしていた。

さて、次に充真院が本陣から他所に宿を移した経緯について見てみよう。四月三十日に岡崎での内藤家の定宿である西本陣中根甚太郎に予定通り到着した。充真院が招かれた部屋は、屋敷内の一番奥、北北西に位置する「上段間」である。図4によるとこの部屋には床の間や違い棚も備えてある。⁽²⁰⁾宿はさっそく玉子蒸し一棹と御菓子一折を、御里付重役大泉市右衛門明影宛にして充真院に差し入れた。差し入れは古い血縁関係ゆえの宿側の好意であるが、現在は庶民である中根家側は、この旅の主人である充真院に直接差し入れるは畏れおおい行為なので、御里付重役宛にしたのである。

充真院は入浴して、その後部屋で寛いで過ごしていると、二年前の宿泊の時に合い、充真院に懐いたこの宿の幼女が挨拶にやってきた。「こゝの娘の子、一昨年も出候ま、尋、少々手遊遣し候」と、充真院は再開した幼女に話しかけて玩具を与えた。⁽²¹⁾懐かしく楽しいひとときを味わったことだろう。

宿で充真院がのんびりとした時間を過ごしていたところ、思いが

けない知らせが届いた。公家衆の通行がこちらに向かつており、もはや岡崎の東にある赤坂まで到来しているという。充真院一行は自発的に公家らに宿を譲ることにした。

中根家に代わりの宿泊地として心当たりの寺でも無いかと相談したところ、この西本陣から一里余りの所に西光寺があるという。西光寺とは浄土宗で、大樹寺の末寺である⁽²⁾。ただ、西光寺はあまり広くないので、もし狭ければ大樹寺が宿泊させてくれるだろうという。話を進めているうちに、「此方御先祖様の御墓有所之由、幸と悦」と、充真院は西光寺に内藤家の先祖の墓があることを知り、その縁を幸いであると喜んだ⁽³⁾。

今後については「先三日計もとまり、又其うへの時次第」と、ひ

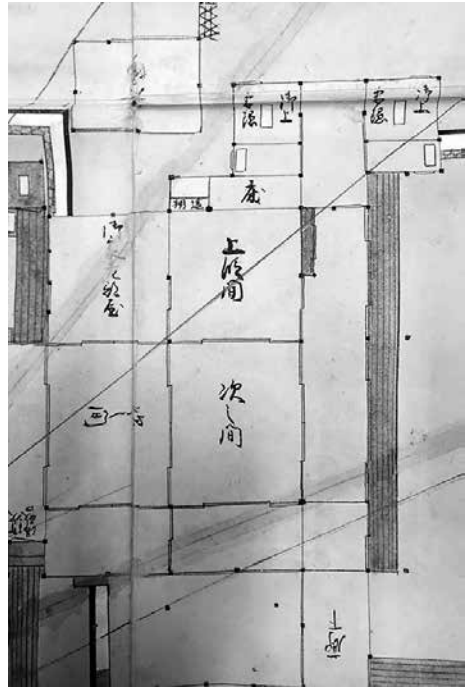


図4 西本陣中根甚太郎家の上段間

とまず西光寺には三日間程宿泊させてもらい、以後については後に決めることにした⁽²⁾。そして、翌日・五月一日の昼食後に西光寺に移動することを決め、四月三十日は西本陣の中根家に一泊したのである。西光寺への交渉は、前述したように中根家が内藤家の三河国にある寺院との事務を文化年間以来担っている⁽³⁾ので、中根家側がさっそく手配したのであろう。

(1) 内藤家を松平家の数ある家臣の中でも上級譜代家臣として位地づけた記載は『新編岡崎市史 中世二』(新編岡崎市史編集委員会、平成元年)六四一頁による。

(2) 『新訂 寛政重修諸家譜』第十三(統群書類従完成会、昭和四十年)、一八二〜三頁。当系譜は幕府が編纂したものであり、大名や旗本らに先祖の事績を提出させたものである。したがって、内藤家が公的な場における自家の歴代当主らの事績に関する見解である。なお、内藤家が編纂した『再選系譜』『再選御系譜』(いずれも明治大学博物館所蔵内藤家文書(架号、第一部・一・三一と、架号、第一部・一・一一八)も、内藤家の初代当主を義清としている。義清は松平信忠・清康に仕えた。しかしながら、内藤家に残された先祖に関する書類のうち、『御系譜関係書類 参州内藤系図一説』(明治大学博物館所蔵内藤家文書、架号、第一部・一・七一〜一二)は、義清の先代として重清を記載している。さらに『新編岡崎市史 中世二』六五〇頁でも義清の父として重清を指摘している。

(3) 岡崎五人衆とは、天野貞有、植村新八、林藤助、石川忠輔、内藤義清である。『新訂 寛政重修諸家譜』第十三、一八三頁に記載がある。

(4) 義清が西光寺に葬られたことについては、『三河国井田野の西光寺に葬る』と『新訂 寛政重修諸家譜』第十三の一八三頁に記載がある。義清夫妻の墓が共に西光寺にあることについては、『再選御系譜』

(8)

- 集」(内藤家文書、架号、第一部・一・五六)や、「再選御系譜」(内藤家文書、第一部・一・一一八)に記載されている。さらに、墓の形態が「御先祖様御廟所三州引合一件帳」(内藤家文書、架号、第一部・二八・八八)に描かれており、宝篋印塔であることがわかる。
- (5) 明治大学博物館所蔵内藤家文書「再選系譜」(架号、第一部・一・三二)、「再選御系譜」(架号、第一部・一・一一八)。これらの系譜を作成した頃、信楽院は無住であった。本文に引用した記載に続き、「当時無住忍阿院兼帯」とある。しかし、允真院が来訪した時期には住職がいた(本稿(19)頁)。その他、内藤家文書の「御鬼録」(架号、第二部・一・二一八)にも、義清夫妻が井田野の西光寺に葬られていると記載がある。
- (6) 岡崎市美術館所蔵西光寺文書(寄託史料)「過現名帳」史料番号二(三一・二)による。
- (7) 大樹寺の過去帳、位牌に關しても註(4)の「再選御系譜集」「再選御系譜」に記載がある。これらの系譜にも「大樹寺塔頭信楽院有位牌、当時無住忍阿院兼帯」とあり、系譜を作成した頃、信楽院は無住で忍阿院が兼帯して管理していたことが記載されている。
- (8) 清長については註(5)の史料、及び「新訂 寛政重修諸家譜」第十三、一八三頁による。重清・清長の墓所については、「桜井村史」(全原利一編、昭和五十六年)二二二頁、「安城市史」(安城市史編さん委員会、復刻昭和五十七年)二五八〜九頁による。
- (9) 家長の頃に三河の地を離れたことについては、「新訂 寛政重修諸家譜」第十三、一八四頁に次のようにある。「この年(神崎註：天正十八年)関東御入国の後一万二千石を加へられ、上総国天羽郡にいて二万石を領し、佐貫城に住す。十九年桜田にいて東照宮御杖をもつて邸地を画して家長にたまはる。」と、天正十八年に佐貫城主として佐貫に居所を、さらに翌十九年(一五八一)に家康から江戸屋敷を桜田に与えられ、関東に拠点を移した。
- (10) 岡崎市美術館所蔵西本陣中根家資料(寄託史料)「東海道岡崎宿家並図」史料番号七。なお、西本陣中根甚太郎のあった場所は、現在岡崎市伝馬通二丁目であり、著者が当地を訪れた平成三十年にはミニストップ岡崎天馬通店が建っていた。
- (11) 西本陣については、「岡崎市史 第三卷」(柴田顯正編、昭和二年)一二七〜八頁とその冒頭に掲載された複製絵図の「伝馬町家順間口書」、『新編岡崎市史 近世三』六二九頁の記載、および六三〇頁に掲載された図五―三二「伝馬町家順間口書の一部」による。
- (12) 岡崎市美術館所蔵西本陣中根家資料「西本陣絵図」史料番号三八。当史料群のうち、この絵図は寄贈史料である。
- (13) 中根家が古くから当地の本陣として確認できることについては「岡崎市史 第三卷」一二七頁、苗字帯刀を許されていたことは『新編岡崎市史 近世三』六三六頁による。
- (14) 明治大学博物館所蔵内藤家文書「再選系譜」、「再選御系譜」による。なお、中根家が松平氏の配下の一家であったことは、『新編岡崎市史 中世二』六四〇頁による。
- (15) 岡崎市美術館所蔵(寄託)西本陣中根家資料「中根氏大系図」(史料番号三〇)による。
- (16) 岡崎が東海道の宿場町であり、譜代大名の城下町として栄えた。大名家が本多氏、水野氏、松平(松井)氏、さらに本多氏と変遷したことは、『新編岡崎市史 近世三』五九二頁に記載がある。
- (17) 明大翻刻本、二六頁、一五八頁。
- (18) 「御先祖様御廟所三州引合一件帳」は内藤家文書、架号、第一部・二八・八八。この調査に関する書類を一件袋にまとめて保存していたことから、内藤家と縁が薄くなっていた三河国の菩提寺に関する調査の成果を以後大切に保管し、調査によって判明した三河国の菩提寺との関係を継承しようとしたことが窺える。
- (19) 中根家が三河国にある内藤家の菩提寺の寺務を担当した一例をあげると、嘉永五年(一八五二)十二月四日に暮の御仏供料を納めたことが、「万覚帳」(明治大学博物館所蔵内藤家文書(架号、第一部・七・一四〇))に記載されている。
- (20) 部屋については註(12)の絵図による。

- (21) 明大翻刻本、一五八頁。
- (22) 岡崎市美術博物館所蔵(寄託) 大樹寺文書の文久二年十一月「末山塔頭諸御礼式」(架号、赤一五一)に大樹寺の末寺の一つとして西光寺が記されている。『大樹寺文書』上、解説三〇頁によると、西光寺は明治初期に大樹寺が多くの末寺を失った際にも、回向院、忍阿院、善楊院、真如院、慈光寺と共に、山内末寺と称し今日に至っている。
- (23) 明大翻刻本、一五九頁。
- (24) 右同。

二 西光寺へ滞在

充真院一行は西光寺に五月一日から八日まで七泊八日も思いのほか長く逗留した。五月一日の昼食後、八つ——午後二時——過ぎに充真院一行は行列を組んで、西本陣中根家を出発して西光寺を目指した。⁽²¹⁾ここは岡崎城下であり、しかも中根家は東海道沿いにあるので供揃えをして行列で移動したのである。西光寺は西本陣中根家から北に位置する鴨田村井田野にある。鴨田村は大樹寺領である。⁽²²⁾岡崎の城下町を通過すると田道——畦道——を出てしばらく歩を進めると、木曾街道と刻まれた石碑があり、ここから分かれ道となる。

西光寺へ向かう際、天気がとても良かった。充真院は「ことく〜天気もよくて、おしき事、つふやきつ、行」と、たいへん天気が良いので、江戸に向かって旅を進めることができなかつたことを惜しいとつぶやきながら、西光寺をめざした。西光寺に行く途中で、充真院は西光寺と大樹寺の本末関係について、少し思いをめぐらし

た。⁽²³⁾

充真院は西光寺の敷地に入る際、まず石段を一間——約一八〇糎——程も登ると門があった。門をくぐるとすぐに寺の建物に庭口のような所があり、ここからあがるとすぐに入側——畳が引いてある廊下——があり、八畳間が二つ続いている様子を目にしている。充真院が招かれた建物は充真院が描いた挿絵(図5)の説明に「本堂へ行口」、すなわち本堂に行く入口が記されており、本堂に隣接していることがわかる。室内の造りから、この建物は書院である。

実は、充真院が滞在することになった書院は建て直したばかりだった。しかも、玄関は未だ完成していなかつたので、庭口のような所から入室したのである。その件について充真院は「此寺の普請

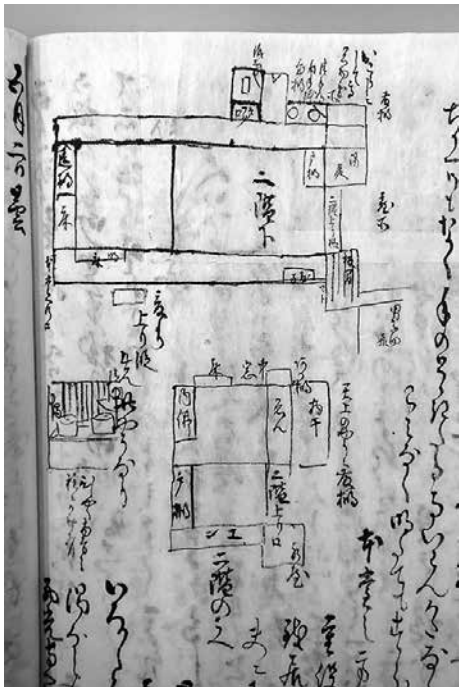


図5 西光寺座敷間取り図

は近比なせるよしにて、玄関は「また出来ず」と記している。⁽⁴⁾

そして、「定めし古寺ならんと思へる所、さなくて、新しく行と、きたる事いわん方なくきれぬ、こみ一つなく」と、たいへん古びれた寺の建物であろうと思っていたが、意外にも古びておらず新しく、手入れが行き届ききれいだった。尤もこみ一つ落ちていなかったのは、充真院が来訪することとなり、西光寺が事前に入念に掃除をしたからであろう。

なお、西光寺の建物について、ここで少し補足しておきたい。充真院は到着した時に目にしたはずの本堂の様子を特に記していない。本堂は嘉永六年（一八五三）三月に再建されており、充真院が訪れた時に十二年を経たところであった。⁽⁵⁾ 充真院は西光寺を創建が古いと認識していたが、その本堂も再建されてさほど時を経ていないので、古色を帯びていなかったはずである。

充真院が案内された書院は二階建てで、部屋が新しいうえ手入れが行き届き清潔で、しかも風流であった。この部屋を見て、充真院はたいへん気に入った。「せまきながらも是にては随分逗留してもよしと思ひ」と、部屋が狭いものの長逗留しても良いと思った。第一印象が実に良かったのである。

充真院は書院内をあれこれと観察している。まず、一階である。床の間には二幅の掛軸と七福神の一人である寿老人の置物が台に乗せてある。違い棚には脇息と広蓋が置いてある。入側には茶道具が備えてある。縁側の方には、風呂や用所——廁——があり、いずれ

も水を使用する場所に、清らかな湯を二種類用意してある。向こう側には、格子があり中高な高さの流しを備え、手拭を置くための角に棚をつけてある。風呂場には、着物を置く棚があり、敷物として毛氈を用意してある。「心附たるとて、かる石迄有もおかし」と、寺側が軽石まで配慮して用意した様子を目にして、充真院は愉快地感じた。

次は二階である。階段は二箇所あり、その一つの階段を上がると縁がある。その右側は涼んだり物干しが出来るようにしてあり、その上には藤棚が設けてある。藤棚は日よけのためであるが風情のある造りであり、短歌を詠みたくなるような心地がした。

向いには関枷があり、左側の座敷の正面に内仏が祀られ、その横の床の間に掛軸と花が置いてある。二之間は、縁側があり、簾をかけてある。ここではお茶をたてるらしく、水屋らしいものが備えてある。一階と二階の部屋を充真院は御付の者たちと眺めて歩いた後に、「上下ともに其きれぬ、ちり一ツもなく、手のと、きたる事いわんかたなく、雨戸のさんに迄もこみなく、明たてもすら〜と出来、皆々悦候」と、一階も二階も共にきれいでちり一つ無く、掃除など手入れが徹底している様子は言葉に出来ない程であったと感想を記している。しかも雨戸のさんにもこみがついておらず、滑らかに開け閉めができるので、皆で喜んだという。開閉の良さについて充真院はその理由を考え、「是は大工のよきか、木之よきか、いつれ持合し物成へし」と、大工の技術が良い、または使用している

材木の質が良いのであろうと書き留めた⁽⁶⁾。

ところで、充真院の知的な個性の一つとして、建物の間取りにたいへん興味を持っていた。そして初めての転居の旅についてまとめた紀行文『五十三次ねむりの合の手』に挿絵として度々、間取り図が描かれていた⁽⁷⁾。実は西光寺の建物内についても、充真院は間取り図を描いた。それが前掲の図5である⁽⁸⁾。

滞在中の部屋割りには、充真院が書院の一階、御付の女性たちが書院の二階、男性の随行員は本堂を使用した。「本堂之方に弥学、医杯居候、重役初は次之方にこた〜致居」と、本堂を充真院と光姫（同行している孫）の御用掛である今西弥学長嘉や医師の喜多尚格らが使い、御里付重役の大泉市右衛門明影は当初は次の間を用いた。

寺域には地藏堂、さらに「御昔様御縁有て参詣せよとの事哉」、すなわち内藤家の先祖——義清夫妻——の墓があるので参拝するよりに勧められたが、もはや夕刻を過ぎ時間がなかつたからである、この日は見合わせた。充真院は西光寺の住職に初めて会い、お菓子を贈った。そして、いろいろな事を思いめぐらした後、風呂に入り就寝したという。

なお、充真院が西光寺の内藤家墓所を参拝するのは、五月五日のことである。参拝後に寺域にある芭蕉の名句「夏草やつはもの共の夢のあと」の句碑を見て、その後千人塚を参拝することとなる⁽⁹⁾。

(1) 西光寺のある地、およびその周辺について、現在の様子を少しふれておこう。西光寺は平地の中の小高い山の頂上にある。かなり急な坂を登る。この寺の周囲は、現在は住宅地である。充真院が見たこの周辺の景色は田である。現在の地形からも、その形跡がしのばれる。小高い位置にある西光寺の周囲は平地であり、直ぐ北の道路を越えると直ぐにゆるやかに一段高くなる。現在の地名は鴨田町深田であり、まさにかつては田が広がっていたことが地名に名残として存するのである。

(2) 西光寺が大樹寺領の鴨田村にあることは、岡崎市美術館所蔵（寄託）大樹寺文書の慶応元年六月「献金連名帳」（架号、赤一六〇）の記載から確認した。当村の井田野であることは、「新訂 寛政重修諸家譜」第十三、一八三頁による。

(3) 明大翻刻本、一五九頁。なお、以下の引用で、五月一日の場合は、特記無き限り同頁からである。

(4) 充真院は西光寺が新築であったことについては、五月五日の箇所に記載している。明大翻刻本では一六二頁である。

(5) 岡崎市美術館所蔵（寄託）西光寺文書と共に棟札が二点ある。そのうち、嘉永六年三月の棟札に「奉再建本堂一字」とある。なお、鐘楼も再建であり、天保十二年三月の棟札に「奉再建鐘楼一基」とある。

(6) 室内が清潔なこと、雨戸の開け閉めが滑らかであったことは、五月一日と同五日に記載している。これに関する引用の前者は一日で明大翻刻本の一五九頁である。後者の引用は五日で明大翻刻本では一六三頁である。後者の引用は、「雨戸しむれば、さんに一ツもちりなく、すほると締め、一枚く〜にさるおる様にして」という文に続いている。

(7) 神崎直美『幕末大名夫人の知的好奇心——日向国延岡藩内藤充真院——』（岩田書院、平成二十八年）一一二頁。以後、本書については「前掲拙著」と略記する。

(8) この挿絵は明大翻刻本では一連の文章よりも少し離れて一五七頁に

掲載されている。

(9) 今西弥学長嘉については、明治大学博物館所蔵内藤家文書「下士以上由緒書」(架号、第一部・三〇・五(一))による。元治元年(一八六四)二月二十一日から充真院・光姫・鐘之助(政義の四男)らの御用掛に就任した。

(10) 明大翻刻本、一六三頁。千人塚、別名、大衆塚は現在、寺の本堂からすぐ南の住宅地内にあるが、この周辺一体もかつては西光寺の敷地内であった。

三 大樹寺参拝(一)——御霊屋・松平家墓所——

翌五月二日に充真院は大樹寺を参拝した。午前中のうちに「今日は東照宮を初、御先祖御墓参りせはやと申出候所」と、東照宮、すなわち徳川家康をはじめ、内藤家の先祖のお墓参りをしたいと、大樹寺に申し出た。⁽¹⁾ 昼過ぎに大樹寺から訪問を承知する旨、連絡があった。さらに、充真院らが訪問の準備をしている時に、大樹寺塔頭の信楽院に「御先祖様御いはた計はこの方に有との事にて」と、内藤家の先祖の墓は無いが、位牌だけが安置されていることがわかった。⁽²⁾ さらに、かつて内藤家の先祖が信楽院に宿泊したこともわかった。信楽院に土産として、お菓子を持参することにした。

出発前から段々と雲が出てきて空模様が怪しくなり、九つ——昼の十二時頃——からとうとう小雨が降り始めたが、雨具を使う程ではなく、笠を被ってしのげそうだった。宿泊地の西光寺の下から大樹寺までの距離はわずか三町——三三〇⁽³⁾程——なので、充真院ら

は徒歩で大樹寺に行くことにした。⁽³⁾ 周囲には農民の家が少しあるものの、田ばかりが広がる寂しい道を進んでいった。その際に、西光寺の住職が充真院一行の先頭に立ち、道案内をしてくれた。

充真院らは大樹寺の惣門に到着した。⁽⁴⁾ 惣門は三代將軍徳川家光による伽藍大造営の折、寛永十五年(一六三八)に建立された。様式は三間一戸の薬医門で、総樺造りである。屋根は切妻造で本瓦葺である。木組みも派手であり、大寺院の惣門としてふさわしい姿である。なお、惣門と山門、さらに本堂は一直線上にある。⁽⁵⁾

しかし、充真院は惣門を見て「門はりつはてもなく」と、惣門が立派ではないと感想を述べている。尤も惣門としては違和感のない大きさである。充真院のこの感想は、参拝した当時、惣門が経年変化により外観が古びて見えた、さらには痛んでいたことによるのであろう。

「少し人と左手に神君様御旗かけの松有」と、惣門から寺内に入り少し進むと左側に徳川家康所縁の旗かけの松があった。この松は「今は大樹と成て、枝は東へくと向て、緑しけるとの事」とあるように、大木で枝が東側に向かって伸び茂っていたという。趣のある枝振りで、葉が豊かで見事だったのである。

さらに少し進むと山門に到着した。この山門も三代將軍家光による大造営の折、寛永十八年(一六四一)に建立した。重層の楼門で屋根は入母屋造、本瓦葺である。⁽⁶⁾ 充真院は山門を見上げ扁額を目にして、「山門大樹と勅額にてひかくとして」と記した。山門の楼

上に「大樹寺」と後奈良天皇宸筆の勅額が掲げてあり、額面の金地がびかびかと輝いていたのである。⁽⁷⁾

山門を通過してから、充真院は東照宮御霊屋、台徳院御霊屋、成烈院御霊屋など三つの御霊屋と、松平家の墓所を順に参拝した。三つの御霊屋は現在しないが、図6のようにつては東照宮御霊屋と台徳院御霊屋が本堂の西側、それらの南側に成烈院御霊屋が、いずれも寺域の西側に建っていた。⁽⁸⁾

さて、充真院が当寺で一番に参拝したのは東照宮御霊屋、すなわち徳川家康の御霊屋である。山門の下を通過してさらに本堂に向かって進み、西にある門をくぐると、東照宮御霊屋がある。この霊屋を見た充真院は、「東照宮御みやは是より至て御鹿抹」と、立派な山門に比べると家康の御霊屋はたいへん粗末に感じた。そこに居た寺の者から、縁側に上がり拝むよう言われ、縁に上がり建物内を見つめた。しかし充真院は「例の眼氣なくに拝するもむつかしく、御開帳さへも無故、何かいやに成、そこくに出行は」と、いつもながら老齡ゆえの弱い視力なのでよく見えず、拝むことさえ難しく、さらに寺の者が御開帳すらしてくれないのでなんとなく嫌になり、簡単に参拝を終えた。

次に参拝したのは、台徳院——二代將軍徳川秀忠——の御霊屋である。この建物も充真院は粗末に感じた。「二代様御たまやとて、是も芝よりは何事によらず悪く」と、江戸の芝にある増上寺の御霊屋と比較すると何もかも劣ると思った。⁽⁹⁾ 参拝の仕方は、またもや充

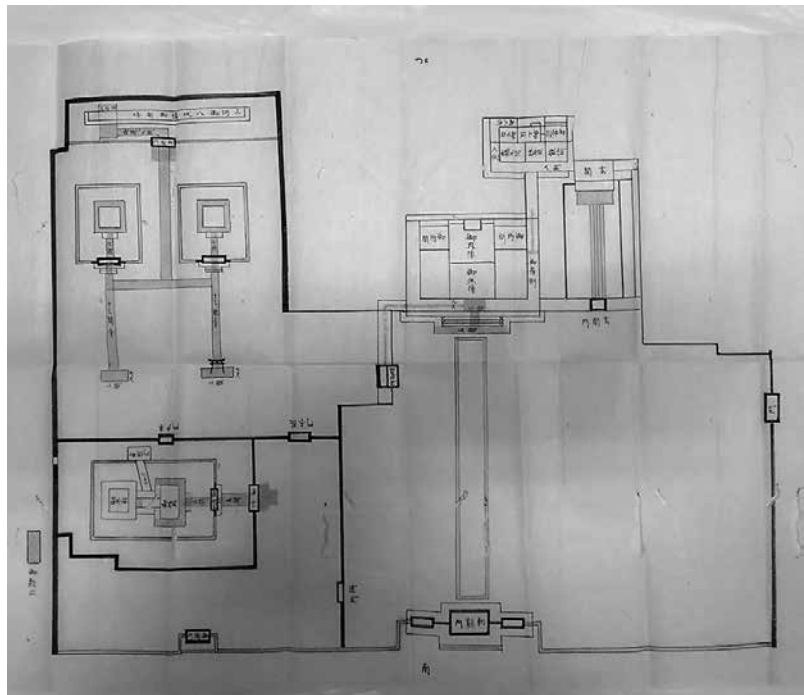


図6 大樹寺御霊屋と方丈(左の上右が東照宮、上左が台徳院、下が成烈院の御霊屋)

真院にとって不本意であった。「又、今の様に拝す計、よくも見せられましと思ひ乍、はき物をぬけよとの事」と、これも先の東照宮と同じように縁に上がり建物内を向いて拝むだけであり、内部の様子を丁寧には見せてくれないだろうと思っていると、縁に上がる入

り口で履物を脱ぐよう促された。

履物を脱いで入り口に足を踏み出すと、「御ごさは雨にて大ぬれの所、やうくつま立行」と、敷いてあった藁葎が雨でずぶ濡れで、充真院は水びたしの所を避けながらろうじて爪先立ちで進んだ。なお、先の東照宮御霊屋と同様の状況では参拝してもつまらないと思ひ、縁に上がらず拝んだ。僧が二人いたが座って控えているだけで、縁に上がるよう声をかけもしない。充真院は早々にこの御霊屋を後にした。

秀忠の御霊屋の南側の梳木門を通ると、さらにもう一つ御霊屋があり、門があった。この御霊屋は誰をお祀りしているのか、充真院は具体的に記していないが、成烈院——松平家八代目の広忠——の御霊屋——である⁽¹⁰⁾。充真院はこれ以上足が濡れるのも嫌であるし、十分に見せてくれないだろうと思ひ、門の所から拝むだけにした。

それから、先に参拝した家康と秀忠の御霊屋の間の道を北に進み、松平氏の墓所についた⁽¹¹⁾。この墓所は寺内の北西にある。「黒板へいにて、御門有、内には御八代様の御墓とて八ツあれとも、至て御そまつにして」と黒塀で囲まれた墓所は、門——御廟門——の向こうに松平氏八人の墓石があるが、たいへん粗末な墓石であると、充真院は感想を記している。充真院が目にした松平家の墓石八基とは、初代親氏・二代泰親、三代信光の宝篋印塔三基と、四代親忠・五代長親・六代信忠・七代清康の五輪塔四基、八代広忠の無縫塔一基のことである⁽¹²⁾。

充真院は「こ、も雨にてこまり候ま、御門迄にて帰り」と、墓所内に入らず御廟門から墓所内を眺めて拝むにとどめた。それでも充真院は、御廟門からこれらの墓の大きさを確認した。「中で大きなか、わつか一間計、段々ちいさきのも有て」と、一番大きいものでもわずか一間——約一八〇糎——程で、他の墓はそれよりも小さいと記した。墓というと、充真院は江戸に居住していた頃に、鎌倉の光明寺にある内藤家墓地の見上げるばかりの宝篋印塔や、実家である井伊家の世田谷にある豪徳寺の墓所を参拝して実際に見ている⁽¹³⁾。これらが充真院の墓石のイメージとなつていることは間違いない。ゆえに、松平一族の墓は充真院が認識している大名家の墓と較べると、小さく数も少なく、さらに敷地も狭いと感したのである。

(1) 明大翻刻本、一六〇頁。以後、本章で注記無き引用は同頁である。

(2) 信楽院の位置は大樹寺内の鐘樓の東側であった。現在、大樹寺保育園があるあたりである。

(3) 充真院の記述には無いが、西光寺から大樹寺へ向かう経路の現状について、少し補足しておきたい。西光寺から坂を下り、北に進むと灯籠が左右に二基ある。鴨田天満宮の参道である。ここを少し進み、途中で西に曲がりさらに少し進むと大樹寺小学校の南側に、かつての大樹寺の惣門がそのままの位置にある。惣門から北をながめると、大樹寺の山門が正面に見える。ここまでおよそ七、八分まで到着する。

(4) この惣門は、現在、大樹寺小学校の南側に建っている。前述したように明治時代に大樹寺の惣門から山門の前までの土地を手放し、そこに広元学校が建設されたが、惣門はかつての位置にそのまま残された。惣門の位置が全く移動していないことについては『新編岡崎市史建造物編一八』の一〇二頁にある。

- (5) 惣門については『大樹寺の歴史』九三頁や『新編岡崎市史 建造物編一八』の一〇二〜三頁に説明がある。なお、現存する惣門は寛永の大造営の折に建設されたもので、県指定文化財である。
- (6) 山門については、『大樹寺の歴史』五四〜五頁と九三頁、『新編岡崎市史 建造物編一八』の一〇三〜五頁、「大樹寺のしおり」(発行・大樹寺)による。この山門も寛永の大造営で建立されており、現在、県指定文化財である。
- (7) 額面が金地であることは、本稿作成に際して大樹寺に行き確認した。扁額は現在、重要文化財に指定されている(『大樹寺のしおり』)。
- (8) 東照宮御霊屋をはじめ、本稿で充真院が参拝した経路を追うに際して、『新編岡崎市史 近世三』一〇五四頁の図七―二八「大樹寺復元図」、『大樹寺文書』下の九頁「大樹寺寺内図」、岡崎市美術館所蔵(寄託)大樹寺文書「御八箇所之絵図(大樹寺全図)」(架号、赤五七七)の記載を参考にして補った。「御八箇所之絵図(大樹寺全図)」は図5として本文中に掲載した。
- (9) この引用部分から、充真院はかつて江戸に住んでいた頃に、芝にある増上寺の秀忠の御霊屋を参拝していたことが窺える。参拝の時期は現在のところは不明である。
- (10) 成烈院御霊屋については、『新編岡崎市史 近世三』一〇五四頁の図七―二八「大樹寺復元図」による。嘉永元年(一八四八)に松平忠の三〇〇回忌に朝廷から成烈院という院号を与えられたことを契機として、嘉永五年十月(一八五二)に御霊屋が完成したという(右同書、一〇五五頁)。この御霊屋への門が椀木門であることについては、岡崎市美術館所蔵(寄託)大樹寺文書「御八箇所之絵図(大樹寺全図)」(架号、赤五七七)で確認した。
- (11) 松平氏の墓所、すなわち廟所は、松平氏の四代親忠が先祖である三代前の墓を移築して創建した。後に、二代將軍徳川秀忠が修復・再建したという。なお、この廟所は現在、市指定史蹟である(『大樹寺のしおり』)。
- (12) 松平氏の墓石については『大樹寺の歴史』の一〇五頁に記載があ

る。なお、現在はこれらの墓石の他に昭和四十四年に建立された家康の墓もある。

- (13) 充真院は内藤家の光明寺墓地は天保十年(一八三九)年に訪れている。この件については、神崎直美「日向国延岡藩内藤充真院の鎌倉旅行―光明寺廟所参拝と名所めぐり―」(『城西人文研究』第三〇巻、平成二十一年)で明らかにした。さらに前掲拙著、一八〜一九頁で簡単にふれた。

四 大樹寺参拝(二)――大方丈・信楽院――

雨に悩まされながらも充真院は寺域の北西の区域にある三棟の御霊屋の参拝を終えて、ようやく方丈にむかった。充真院は本堂と庫裏の間を通り、玄関から方丈に上がった。まず、東照宮をお祀りしている所――小方丈――を拝み、さらに廊下を通り大方丈(図7)の座敷に招かれた。充真院はこれから大方丈の障壁画を目にするこゝとなる。ここでこの障壁画について少し説明しておこう。

充真院は障壁画を描いた絵師について全くふれていないが、実はこの襖絵は冷泉為恭(岡田為恭)の手によるものである¹⁾。京都の狩野家の出であるが、狩野派よりも古大和絵を学び、幕末に大和絵師として活躍した著名な人物である。安政の大樹寺大火災後に再建した大方丈の障壁画を、同四年(一八五七)に三十四歳で完成させた。この障壁画は為恭の代表作と位置づけられている。為恭は勳皇思想の持ち主であったが、元治元年(一八六四)五月五日に佐幕派

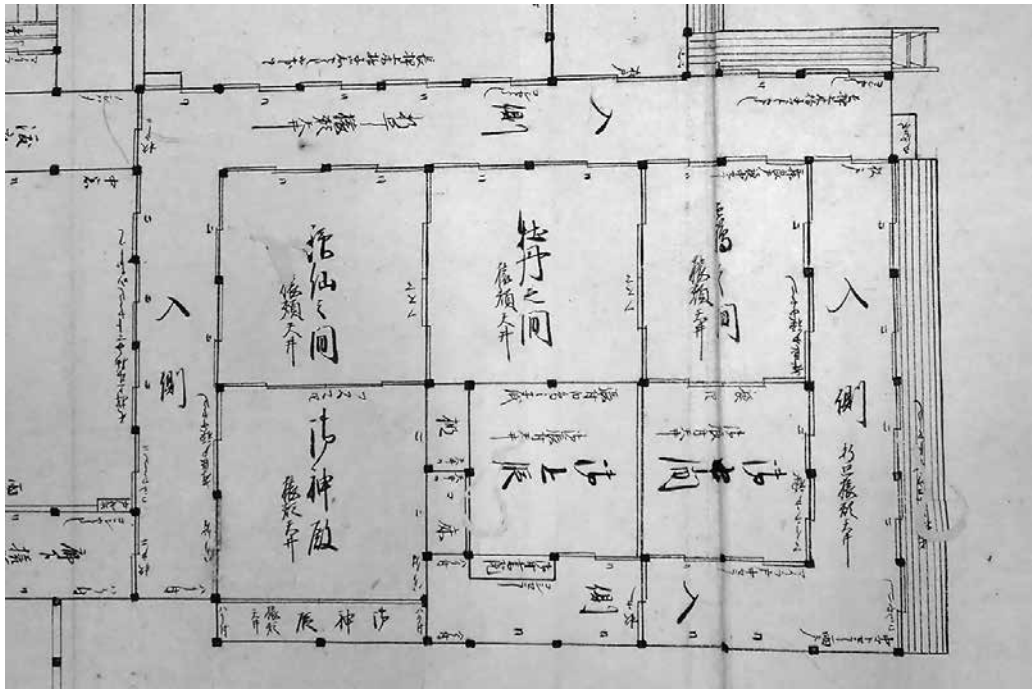


図7 大樹寺大方丈

と疑われて暗殺された。充真院は為恭が不慮の死を遂げてから一年後にこの絵を見たのである。

まず、充真院は大方丈の応接部屋の一つである鶴之間に案内された。鶴之間は大方丈の応接部屋として三之間——格の高三番目——に相当し、三十五万石以上の大名が通される控の間である。内藤家の所領は七万石であるので、充真院は実に破格の待遇を受けたのである。

充真院は案内役の僧から「上ノ間の方を向て居候様に役僧出て指図し」と、上之間の方を向いて座っているようにと声をかけられた。そこで「其座敷を見れば、田に鶴の絵書たしふすまに」と座敷を見ると襖に鶴の絵が描いてあった。この部屋の広さは一二、五畳で、襖絵に部屋の名称の所縁である鶴が描かれていた。

この部屋の入側の杉戸には、「入りかはの杉戸には、しやかう猫を書て有」と、麝香猫が描いてあった。具体的には左に白黒縞の一匹、右に茶色・黒斑が一匹と白色の子供猫一匹、描いてある。麝香猫の背景に蘇鉄が描かれているが、充真院は蘇鉄については一言もふれていない。なお、この絵は為恭自筆の目録には「蘇鉄麝香」と記してある。

ところで、充真院自身は老年期に猫を飼い、さらに内藤家は鶴を飼育していたことがある。したがって、これらの襖絵に描かれていた生き物は充真院にとって身近な存在であった。ゆえに、親近感を感じたのではなからうか。

いよいよ大樹寺から充真院へ接待がはじまった。まず、茶と煙草盆が充真院に出された。役僧が二人やってきて充真院の向かいに座り、丁寧な挨拶を交わした。次に、寺側から充真院に二度も菓子が出された。さらに台に引盆——懷石に使用する酒を飲む塗盆——を乗せて持ってきたので、充真院は酒が振舞われると推察し、丁寧な応接と思ったが、結局、酒は出なかった。寺側が接待に際して、少々混乱したようだ。

それから役僧に促されて、充真院は随行者らが待っている次座敷——牡丹之間——の隣の部屋に連れていかれた。鉄仙之間である。

この部屋は四方にそれぞれ四枚ずつ襖があり、鉄仙が描かれている。充真院は「鉄せん⑧の絵四まい唐紙の前へすわれよといふゆへ、心におかしく、目の前から紙計見るやうと思居しに」と、唐紙——襖——の前に座るように促され、心の中で目の前の襖だけを見るように言われたことをおかしく思った。実はこの襖を開くと、そこは御神殿だった。御神殿には内仏があり、ここにも東照宮の大きな厨子があり、充真院はこれを拜んだ。

さらにこの厨子の後に、大樹寺の宝というべき貫木神かんぬきがみが安置されていた。充真院は貫木神について、「其くわんぬき神とは何様を祭し神哉と尋しかは」と、誰をお祀りした神なのか僧に質問した。実は貫木神は江戸に数回もたらされ、江戸城内や尾張藩の上屋敷で開帳されたことがある。内藤家の親戚である尾張藩上屋敷での開帳は天保七年（一八三六）である。珍しい出来事であるが、充真院は江

戸で貫木神に関する情報を得ていなかったのである。充真院の質問に対して「是は御十九才の御時、御軍有しに、此寺にて御かせい申上候節、取あへす門のかんぬきをふりて敵をはらいて御勝利有しゆへ、神にまつりし物と申ぬ」と僧が返答した。すなわち、徳川家康が十九歳の頃に、桶狭間の戦いで今川義元が敗死したため、身の危険を感じて大樹寺に逃れてきたのを匿い、家康を追ってきた野武士が寺を包囲した際に、祖洞和尚が門の門を引き抜き、門を振り回して野武士らを追い払うのに成功したので、その門を神としてお祀りしたのである。

充真院は「目悪くてよくは拜し兼候と申候へは」と、自分は目が悪いのでよく見えない旨を僧に伝えたところ、僧が「近く寄拜せよ」と、近くで見える事を勧めてくれた。おかげで、充真院は貫木神を近くでよく見ることができた。貫木神には家康が敵・味方かわからずに斬り付けた刀傷があった。充真院の次に、御付の者たちも貫木神を見せてもらった。

充真院は貫木神をお祀りしている御宮の外観と貫木神の安置の仕方について、「かんぬき神は御宮は中高く、両方屋根ひく、して、中に黒ぬりの御紋附たる箱の上に、赤地の錦の袋の上に有、御宮は一問もあらん」と文章で表現し、さらに挿絵（図8）も描いている。挿絵には「黒ぬりにて、御屋根には中に黒ぬりに葵の御紋之箱の上に、紅地の錦のふくろの上にかんぬきのせ有」とさらに補足説明をしている。御宮の屋根は左右が低くて中央が高く、その中に黒

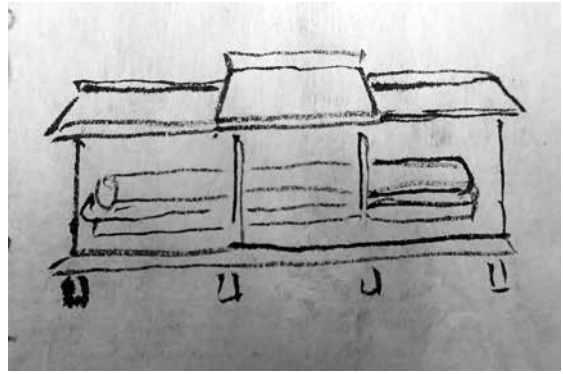


図8 貫木神

塗りで徳川家の家紋である葵の紋を付けた箱が置いてあり、その上に赤い色の錦の袋を敷いて貫木神を安置していたのである。

その他に、充真院は経机に御朱印状——幕府が大樹寺に寺領を安堵した書類——が二箱に乗せてあり、それらを少し見せられた。見せてもらった以外に御朱印状が一三〇

状はありと説明された。多数の朱印状が存在するのは、徳川家が大樹寺を厚く庇護したゆえである。

充真院らは貫木神を拜見した後に、上ノ間——上段之間——を見せてもらった。上段之間とは將軍御成りの間のことである。この部屋には、為恭の自筆目録に「円融院天皇子日御遊之図」と記した襖絵がある。円融天皇が若菜摘みを楽しんでる様子を描いてある。¹¹⁾

充真院はその襖絵を見て次の様に記している。「上ノ間のはり付は、天子之小松引にて、床之上の松の陰に半分御貌出て有か天子也、外は公家衆大せい遊び居気色」。すなわち、上段之間の襖絵は

円融天皇の春の野遊びである小松引きを描いており、床の上の松の陰に半分だけ顔が見えるのが天皇である。その他には大勢の公家衆が遊んでいる姿が描かれている。

二ノ間、すなわち下段之間は秋の様子を描いた襖絵がある。この襖絵は三条左大臣実房公の茸狩の図のことである。為恭の自筆目録に「三条左大臣実房公茸狩之図」と記した作品のことである。¹²⁾

これらの襖絵を見た充真院の感想は、「春秋とせし思ひ付はよけれど、其様に金なそもよふなく、何かへかくしきはり付」と、上段之間と下段之間とで春秋を取り合わせた趣向は良いが、背景の金箔の具合が良くなく、なんとなくぴかぴかかすすぎた金箔の施し方であると感想を述べている。絵に造詣が深い充真院らしい意見といえよう。充真院はけばけばしい色彩を厭う感覚の持ち主であるが、それがここでも窺がわれるのである。¹³⁾

充真院はその次に、徳川家康お手植えの椎の大木を見た。枝が東に向かつてよく茂っていた。「御庭に御手うへの椎之木、大樹と成て」と充真院は記している。この椎の木は先年——安政二年——の大樹寺大火災で焼失をまぬがれた。なお、この椎の木は今日も現存している。

ひととおり参拝が終わった。「是より方丈御あい申とて出て来て」と、住持が充真院に挨拶するためにやってきた。充真院はこの僧について具体的な名を記していないが、大樹寺住持四十九世の入誓彦であろう。¹⁴⁾ 住持は充真院にまず御十念——南無阿弥陀仏を十回唱

える——を授け、それから挨拶を交わした。住持は「役僧よりは丁寧にて、色々咄して引」と、役僧よりも丁寧な物腰の人物で、充真院としばらく歓談した。住持が退出した後、さらに蒸菓子と茶が充真院に供された。茶を飲み終わると二人の役僧が別れの挨拶にやってきて、充真院は玄関に向った。

ところで、充真院の大樹寺参拝は、大樹寺側の記録にも書き留められている。「元治二年日鑑」であり、その記事は左記の通りである。

二日雨 延岡内藤豊(つとむ)後守殿養母・縁女、道中筋差合候二付、西光寺へ逗留、今日御宮初、惣御霊屋へ内拜被願度旨申来、聞濟遣ス、夫分掃除申付、八ツ頃案内申遣ス、(中略)、鶴之間へ相通ス、茶・煙草盆・菓子式通差出ス、○役人・且附人・女中へも茶・菓子出ス、(下略)⁽¹⁵⁾

その内容を以下に説明しておこう。五月二日、天気は雨。延岡藩主の養母であった充真院と縁女、すなわち光姫が、旅の途中で支障があり西光寺へ宿泊している。今日、東照宮をはじめ全ての御霊屋を参拝したいと願い出があつたので了解した。それから寺内の掃除を命じて、八つ——午後二時——頃に案内をした。(中略) 鶴の間に充真院と光姫を接待のために招き、茶と煙草盆、御菓子を二名分出した。内藤家の役人と付き人、女中らにも茶と菓子を出した。

この大樹寺の日鑑により、実は充真院と共に光姫も一緒に大樹寺に参拝したことが確認できる。随行した御付の者たちも、茶や菓子を振舞われて手厚い対応を受けたのである、

最後に、充真院は大樹寺の東側に隣接する信楽院に赴いた。玄関を出てから庫裏門をくぐり、信楽院に着いたのである。当時の信楽院の住職は内藤賢寿である。⁽¹⁶⁾ 充真院はまず、「御ふたかた御いはるを拜し」、すなわち義清とその妻の位牌を拜んだ。信楽院でも充真院に菓子を出して接待した。

充真院は信楽院の庭を目にした。「庭に美事に夏菊咲有しゆへ、少々好もらひしかは、悦て根もくれんとい、しか、旅中故、致方なくとて行、枝折にしてみらひ」と、信楽院の庭に見事に夏菊が咲いていた。充真院はこの夏菊が気に入り、少し欲しいと伝えた。充真院がこのような要望を示すのは、実に珍しいことである。信楽院の住職はその申し出を喜び、根ごと差し上げると言ったが、充真院は旅の途中ゆえ、根ごと貰うことは辞退して枝折にした夏菊をいただいた。

充真院が信楽院の参拝を終えて帰宅の途につこうとした頃、雨が次第に強く降りはじめたので、西光寺に残してきた充真院の駕籠を手配した。充真院は雨の中を駕籠に乗り信楽院をあとにした。

西光寺に到着した充真院は、「御ひやう所へも行んと思ひしか」と、当寺にある内藤義清と夫人の御廟所に御参りしたく思ったものの、「雨天ゆへ本堂計拝し、いつれ天気次第にと申し」と、雨が

降っているので本堂だけを拝み、御廟所はいずれ天氣が良い時に参拝することにした。そして、「御二方御院号に直りし事、信楽院にては知らねは、右之段も申、御いはい直し上候様にと申置ぬ¹⁷⁾」と、義清夫妻について内藤家では当時、淨心院様・皓月院様と院号に改めて称していたが、充真院が信楽院を参拝した際に、信楽院はその事実を把握していないことがわかった。そこで、信楽院に院号を伝えて位牌を改めるように指示した。

西光寺は、帰宅した充真院に茶と菓子を供した。疲れを労うための心遣いである。「もはや公家衆御通り済候哉と尋しかは」と、充真院は公家衆が岡崎を通行し終えたか尋ねたところ、「明日に成るとの事聞、扱々こまりしと思ふのみ致方なし」と、通行は明日であると返答があり、困ったものの仕方ないとあきらめた。

- (1) 冷泉為恭、およびその作品に関する説明は『新編岡崎市史 近世三』一〇五七頁、一一二八〜三〇頁、『大樹寺の歴史』八六〜八頁、九八頁と『大樹寺文書』上、解説二八頁による。さらに、岡崎市美術博物館で平成十三年に開催された展示会図録『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』には、為恭の説明、および大樹寺の障壁画が写真で掲載されている。なお、為恭の障壁画は現在、収蔵庫内に展示・収納されている。

- (2) 『大樹寺文書』下、八頁によると、大樹寺の応接部屋は六部屋ある。それは壺之間、中之間、鶴之間、牡丹之間、鉄仙之間、広間である。訪問者の身分・立場により案内される部屋が異なる。鶴之間に接続された例としては大名では南部信濃守がいた。なお、『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』の七八頁では、応接部屋を上段之間、下段

之間、鶴之間、牡丹之間、鉄線之間、貫木之間と記している。

- (3) 明大翻刻本、一六〇頁。以下、注記なき引用は同頁。鶴之間の襖絵は展示会図録『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』一〇二〜九頁に掲載されている。いずれの絵も現在は収蔵庫に展示してある。なお、これらの絵は平成に修理されたという。

- (4) 『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』では「蘇鉄猫図」と題して、一四四頁に写真が掲載されている。

- (5) 『岡崎市史 第八巻』五六三頁と『大樹寺の歴史』八七頁による。

- (6) 充真院が猫を飼っていたことと、内藤家が鶴を飼育していたことについては、前掲拙著の八〇頁と六六頁で紹介した。

- (7) 『大樹寺文書』下の八頁に、牡丹之間で応接された者の例が記してある。岡崎藩本多家の家老、旗本松平藤九郎、高田藩榊原氏の用人格兼書物方、越前両御女中などである。大名家の役人や女中が牡丹之間に通されているので、充真院の御付の者たちがこの部屋に通されたのは妥当といえよう。

- (8) 明大翻刻本、一六一頁。以下、注記なき引用は同頁。但し、挿絵の補足説明引用のみ一六〇頁。鉄仙之間は四方の一面ごとに四枚ずつ襖がある。このことは、岡崎市美術博物館所蔵（寄託）大樹寺文書の安政年間「大樹寺旧建築設計図」（架号、赤三九五）から確認できる。なお、鉄仙之間の襖絵は、『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』の一八〜二五頁に写真が掲載されている。図録では「鉄線之間」と表記している。

- (9) 貫木神の江戸開帳については、『新編岡崎市史 近世三』の一〇五三頁。

- (10) 明大翻刻本の一六一頁では「御□有しに」と解説不能の記載が付している。原本を確認したところ、□に相当する箇所は「軍」であったので、本稿では「軍」と表記した。

- (11) 為恭の自筆目録については『岡崎市史 第八巻』（柴田顯正編、昭和五年）五六三頁、『大樹寺の歴史』八六頁による。『大樹寺文書』上、解説二九頁によると、この將軍御成之間でこの絵を見た將軍は十

四代家茂が唯一である。

- (12) 展示会図録『冷泉為恭展——幕末やまと絵夢花火』の七九頁に下段之間から上段之間から撮影した写真、上段之間の襖絵は八六〜九一頁、下段之間は九四〜一〇一頁に写真が掲載されている。將軍御成りの間の襖絵は、現在、国重要文化財に指定されている。為恭の自筆目録については『岡崎市史 第八巻』五六三頁と『大樹寺の歴史』八七頁による。

- (13) 充真院がけばけばしい色彩を嫌うことについては前掲拙著一八二頁。

- (14) 大樹寺住持については、『新編岡崎市史 近世三』の四四一頁、一三八三頁による。

- (15) 岡崎市美術館所蔵(寄託) 大樹寺文書「元治二年・慶応元年日鑑」(架号、赤三)。なお、当該史料は『大樹寺文書』下、岡崎市史料叢書)一五九頁に翻刻文が掲載されている。当本で解説不明の□について原本を確認したところ「鶴」であったので、本稿では「鶴」と表記した。

- (16) 岡崎市美術館所蔵(寄託) 大樹寺文書の「檀中直拔書」(架号、赤二三五)の末尾に「信楽院住職 内藤賢寿」とある。さらに明治六年十月「当国御門末并又未曾孫寺院史」(架号、赤二三七)には「信楽院住職 内藤賢寿 二十二年十月」と記されているので、内藤賢寿は嘉永三年(一八五〇)に信楽院の住職になったことがわかる。さらに明治八年「境内其他什物等取扱書」(架号、赤二四三)に内藤賢寿の氏名と捺印があるので、嘉永三年から明治八年(一八七五)に住職であったことは確実である。充真院が当初、信楽院についての情報を知り得ていなかったことから、推測ではあるが内藤賢寿とは内藤家の本家筋ではなく、別家の内藤家の出身であろうと思われる。内藤賢寿とは幕末・明治を生きた人物であるが、具体的にどのような人物なのか明らかにすることを今後の課題としたい。

- (17) 明大翻刻本、一六二頁。以下の引用も同頁。

五 大樹寺参拝後の日々——内藤家墓地参拝——

その後、充真院は七日まで西光寺に滞在し、八日の夕方に西本陣中根家へ戻り一泊してから、九日に岡崎の地をようやくやくあとにした。

四月三十日に岡崎に到着して以来、十日に及ぶ長逗留になったのは、西本陣から宿変えをする因となった公家の岡崎宿泊が五月三日に完了したものの、さらに六日に別の公家の通行の報がもたらされたことによる⁽¹⁾。相次ぐ公家の通行は、幕藩体制が揺れ動き朝廷側の活動が活発化した時期ゆえで、充真院の旅も時勢に影響をうけたのである。足止めの日々を重ね、充真院は旅の再開を気にしていた。四日に「尚格に占はせ候所、七日迄はふさかりとの事」と、侍医の喜多尚格に占いをさせたところ、七日まではこの地に滞在する⁽²⁾と。尚格の本職は医師だが、占いにも精通していたようである。

さて、充真院は宿替えを契機に内藤家の先祖——義清夫妻——の墓が当地にあることを知り、参拝を希望していた。内藤家の墓が大樹寺にあるという当初の情報は誤りで、実は西光寺にあり、五月五日に参拝が叶った。西光寺に滞在していたにもかかわらず、墓地への参拝が五日になったのは、二日の午後から四日まで雨が降り続いたからである。旧暦の五月初旬は折りしも梅雨であり、充真院が先祖の墓に詣でたのは西光寺に滞在してから既に四日が過ぎていた。

五日は久々の晴れであった。充真院は西光寺にある義清夫妻の墓を参拝した。充真院は義清夫妻を「浄心院様」「皓月院様」と院号で表記している⁽³⁾。夫妻の墓について、充真院は墓石の高さ、形式、状態、囲いの様子を次の様に書き留めた。「昔の思ひ出られ御印は二尺計の御りんの至てせい少し残しのみ、玉垣は石にて積みもせて有⁽⁴⁾。すなわち、墓の高さはおよそ六六程程であること、形態は五輪塔だが、甚だしく破損しており、礎石の部分がわずかに確認できる程度であること、墓地の囲いは石材を用いない簡素なものであったという。とりわけ夫人の皓月院の墓は、「誠に有か無かと思ふ程残」と、実にわずかしが形を留めていなかった。実は夫妻の墓は宝篋印塔だが、大破していたので充真院は墓石の形式を正しく把握できず、五輪塔と誤認したのである⁽⁵⁾。

充真院は激しく破損した義清夫妻の墓を目にして、自分が思いがけず西光寺に宿泊することになったのは、義清夫妻から引き合わされたに違いないと感じた。「昔の事のみ思ひ出、参れよとの御引合、宿もあらんに此所にて泊るといふ縁の思はれ、そゝろ哀に思ふ」と、内藤家の家人が久しく訪れていなかった墓の主である夫妻が、自分たちを思い出し参拝してほしいゆえに、内藤家の定宿西本陣中根家がありながら、充真院を西光寺に宿泊させたのであろうと思いついた。充真院は忘れられていた義清夫妻をたいへん不憫に思った。夫妻の墓には西光寺側が供花の定番である櫛の他に、端午の節句ならではの花菖蒲、さらに夏菊があらかじめお供えしてあつ

た。

破損の甚だしい義清夫妻の墓について、充真院は「御墓立直し上てはいか、哉、余りかすかに成しと尋しかは、昔のま、かかへつてよしとい、ぬ」と、墓を再建してはどうかと尋ねたが、建立以来のままの方が良いと言われたという。返答した人物が誰なのか充真院は明記していないが、西光寺の住職であろう。

現在、義清夫妻の墓は本堂の南側にある市営墓地の中程にある。図9の様に小型の宝篋印塔の墓石が二基並び、向かって左には墓誌もある⁽⁶⁾。前述(6頁)した文化期の調査で記録された図(図10)と同様に宝篋印塔として、後世に整備されたのである。

充真院は西光寺逗留中に、義清夫妻に関してもう一つ行動をおこした。それは位牌の整備である。八日に、西光寺と信楽院に安置してある義清夫妻の位牌の表記を院号に改める手配を指示したのである。西光寺は「御いはる様御院号得候節には自分にて直し候由に付」と、寺で訂正するというのでその負担として三百文を渡した⁽⁷⁾。一方、信楽院について具体的な金額を充真院は明記していないが、位牌代を支払ったという。信楽院の場合は新しい位牌を仏具業者に発注したのであろう。

ところで、充真院は西光寺滞在中に西光寺、大樹寺、信楽院、西本陣中根家から、度々あたたかな心遣いを受けている。思いがけない事態が重なり長い滞在となった日々は、ちょうど梅雨時で連日雨が降り、充真院は外出できずに西光寺の書院で過ごすことが多かつ



図9 義清夫妻の墓（右が義清、左が夫人の墓）

た。それぞれが、充真院の無聊を慰めようと、お菓子や節句ならではの品、充真院が好きな花などを贈り物として届けてくれた。

中でも西光寺は充真院らが過ごしやすいよう、何かと気遣ってくれた。その様子を具体的に見ておこう。西光寺は三日にお汁粉を充真院らに差し入れた。この日は雨が降っており、充真院は入浴したり髪を整えて過ごしていた。そこへ「雨中なくさみとて、おゆるこ到来」と、雨のために室内にこもって過ごしている充真院の無聊を慰めるためにおゆるこ——お汁粉——を差し入れてくれたのである。しかも「次向へも出す」と、次の間に控えている御付の者たちの分まで大量のお汁粉が用意されていた。

さらに西光寺は六日に「茶入て、あられのふり出し到来せしと出



図10 文化年間の義清夫妻の墓

すなど」と、あられが入った振出——小粒の菓子を入れる容器——を戴いたからと、茶に添えて充真院に供し、七日には餅菓子を贈ってくれた。

しかも、西光寺は充真院が毎日入浴できるように風呂を沸かしてくれた。当時としては、風呂の湯を沸かすことは手間がかかるが、充真院が気持ちよく過ごせるように、心遣いしたのである。さすがに充真院は申し訳なく思い、辞退したこともあった。西光寺は端午の節句に先立ち四日に菖蒲湯をたててくれた。充真院は「せうふ湯とてよく心附湯立て候、やはりせうふを入て也」と、西光寺が親切に菖蒲湯を用意してくれたことに感謝し、さらに当地でも江戸と同様に菖蒲の葉を入れた湯に入る習慣であると書き留めている。

西光寺は充真院らが当寺を発つ八日に、名残を惜しむかのように繰り返し丁寧な対応をしてくれた。「茶はんの馳走と成、御備へ成候御備物、寺より戴かせ候」と、茶碗蒸しを振舞って御馳走してくれたうえ、御供え物を土産に持たせてくれた。さらに同日の夕方に充真院が西本陣中根家に到着すると、西光寺がわざわざやってきて、三州名産の杉原紙を充真院に贈っている。西光寺は充真院一行が九日に中根家を発つ時にも別れの挨拶に訪れた。充真院は西光寺に延岡産の煙草を御礼の品として贈った。

大樹寺はおかきを届けてくれた。三日に「逗留中のつれ／＼なくさみにもと、あけかちん二重到来」と、逗留中の手持ち無沙汰の気晴らしにと、あけかちん——揚げ餅、おかき——を重箱に二箱贈っ

てくれた。

信楽院からは、夏菊を贈られた。五日に「寺より菊の花、節句の祝義として、信楽院より申来り候に付到来」と、信楽院から端午の節句の祝儀の品として、充真院に菊の花が届いた。二日に充真院が信楽院を参拝した際に気にいり、もらったあの夏菊を再び贈ってくれたのである。実に濃やかな信楽院の心遣いである。さらに、信楽院は八日に充真院が西光寺を発つ前に、「信楽院暇乞に参り、小菊もらひ候」と、充真院にお別れの品として小菊を贈ってくれた。小菊とあるが、充真院がたいそう気にいった夏菊のことであろう。充真院は信楽院から三度も夏菊を贈られたのである。

西本陣中根家からは、柏餅を贈られた。四日に翌日の端午の節句の品として、「本陣より、明日は節句とて、柏餅もらひ候」と充真院に届けられた。さらに、七日に連絡事項を伝えにきた際に、手製の味醂酒と重箱に詰めた五目寿司を充真院一行に贈ってくれた。当地の人々のあたたかさに支えられた滞在であったといえよう。

ようやく、八日の夕方に充真院一行は西光寺から西本陣中根家に移動した。七日に中根家から、八日の昼以後には充真院が宿泊できるように準備していると連絡が届いたので、移動のための準備を少ししておいた。八日は出発前に、大樹寺から使僧が挨拶に訪れた。充真院からも返礼として挨拶の使者を大樹寺に派遣した。信楽院もやってきて、前述したように充真院に小菊を贈った。

それにしても、思いがけなく長い西光寺での逗留であった。充真

院は「供之者参り、駕籠杯出し候て、ならへ置を見てやうく立候様に成しと悦」と、お供の者たちが駕籠を並べて出発の準備をしている様子を目にして、やっと出発できると喜んだ。西光寺を出発しようとした時、突然、雨が降り始めた。充真院一行は雨の中を進み、西本陣中根家に六つ半——夕方五時頃——前に到着した¹¹⁾。

宿の主人中根甚太郎と共に、充真院に懐いた宿の娘が充真院を迎えてくれた。馴染みの宿の者たちに、充真院は公家が宿に逗留中の様子を尋ねたが、よく見ていないという返答だった。公家は宿に女人禁制と記した幟を掲げ、女性たちが公家を見るところか台所で働くことも禁じられ、公家らが見ている部屋から遠い座敷に一つに集められて過ごさせられたという¹²⁾。

- (1) この情報は五月四日に充真院の所にもたらされ、秋月藩黒田家の奥方も充真院と同じように本陣を遠慮して近隣の寺に滞在していたと、明大翻刻本の一六二頁に記してある。
- (2) 明大翻刻本、一六二頁。なお、以下で三日から五日に関する記述や引用は、特記なき限り当頁による。
- (3) 明大翻刻本、一六三頁。以下で五日の内藤家墓地参拝に関する記述や引用は当頁による。現在、本堂の南にある市営墓地の middle に、内藤義清夫妻の墓所がある。墓所の囲いは二辺四方である。義清の墓が向かって右で高さ八四、五^サ、夫人の墓は左で高さ八四、〇^サである。後世に義清の墓の相輪上部を切断して、上部が欠損した夫人の墓に接合した様子が確認できる。
- (4) 明大翻刻本では引用の「二尺計」の次の箇所を挿絵と解釈して、下部が開いた丸のような図を入れているが、原本を確認したところ挿絵

ではなく、平仮名の「の」である。

- (5) 明治大学博物館所蔵内藤家文書「御先祖様御廟所三州引合一件帳」による。なお、当史料によると宝篋印塔の石材は伊豆石という。
- (6) この墓誌は、平成十一年に内藤家当主夫妻（久邦氏・恵子氏）が建てたもので、義清は「浄心院殿春山善芳大善定門」、夫人は「皓月院殿悦窓啓善大姉」と刻まれている。時を経て、図らずも充真院の願いが叶ったのである。
- (7) 明大翻刻本、一六四頁。なお、以下の六・七日の記事も特記なき限り当頁による。
- (8) 明大翻刻本、一六四頁。
- (9) 明大翻刻本、一六五頁。
- (10) 明大翻刻本、一六五頁。
- (11) 明大翻刻本、一六四頁。
- (12) 明大翻刻本、一六四～五頁。

おわりに

充真院の大樹寺参拝を中心に検討しながら、滞在先の西本陣中根家や西光寺での様子について明らかにした。岡崎での日々を検討した結果として、次の四点についてふれておこう。それは、岡崎での充真院の寺院参拝の姿勢、当地の寺院との縁の再構築、滞在中の充真院の思い、充真院の人物像に関してである。

まず、岡崎での充真院の寺院参拝の姿勢は、所縁の主家と内藤家の先祖など故人を悼み参拝するものであった。ゆえに、御霊屋や墓地に足を運び、さらに位牌を拝んだ。大樹寺で徳川家康、秀忠、松

平広忠の御霊屋、松平八代の墓地を参拝したのは、内藤家が元はこの三河の地で松平氏の家臣であり、後に徳川家康により大名に取り立てられ今日があるという家の歴史からも、崇敬の思いが一層深いといえよう。

雨が降る中での御霊屋参拝は、雨で足がずぶぬれになり、日頃の御殿暮らしでは体験しない不快な状況に閉口した。松平家墓地参拝は墓地の中までは入らずに、門から墓地の敷地を眺めて拝むなどと、省略した場面もある。省略した参拝とはいえ、当時としては高齢の六十六歳の充真院が、雨の中を御霊屋と墓所、都合四ヶ所の参拝を中止しなかったという事実は、充真院が内藤家祖先所縁の主人である松平家、徳川家に対して、譜代の家人として厚い思いを寄せているからであろう。

信楽院には内藤義清夫妻の位牌を拝むために訪れ、滞在した西光寺では義清夫妻の墓所を参拝し、位牌を拝んだ。

もちろん充真院は当時の人々ならではの深い信仰心を有しているが、岡崎での寺院参拝は宗教・信仰そのものに対する敬虔な気持ちというよりも、お祀りされている故人を悼み崇敬する気持ちが前面に表れていたといえよう。

次に、岡崎の寺院との縁の再構築についてである。当家の公的な系譜で筆頭に位地づけられる義清と妻の墓や位牌がある内藤家所縁の地でありながらも、内藤家家人の来訪が絶えていた。充真院は大樹寺の塔頭信楽院で位牌を拝み、当院と縁を結び直し、西光寺では

もはや痛ましい程に朽ち果てた義清夫妻の墓に詣でた。充真院は内藤家の先祖を崇敬する念が厚く、さらにその心に基づく行動として、墓を参拝し、位牌の整備を指示することを実現したのである。

実は、充真院は文久三年（一八六三）の江戸から延岡への転居の旅の途中で、近江国の大練寺に立ち寄り、ここでも既に内藤家の家人が訪れることなく久しい家長と元長の墓を参拝していた。^①岡崎ではさらに遡る祖先の義清夫妻に思いをはせ、行動したのである。

充真院は参拝に訪れた大樹寺や信楽院で、参拝時に丁寧に応接されたうえ、その後も当地滞在中に心遣いを寄せられた。西光寺も逗留中に手厚く配慮してくれ、実に懇切であった。これらの寺が充真院に対する様子から、身分制社会における寺と大檀那の家人という間柄に基づく礼儀を越えて、あたたかな人間関係が窺われる。なかでも信楽院が充真院に三度も夏菊を贈ってくれたことは、微笑ましさすら感じられる。

寺と良き関係を充真院が結べたのは、その教養豊かな人柄も一因^②している。前述したように大樹寺で住持と会った際に話しはずんだ。当時の知識人である僧、しかも大樹寺筆頭の僧と充真院が様々な会話を成し得たのは、充真院が深い教養を身につけているゆえであろう。寺側から充真院は好印象、さらには尊敬の念を持たれたからこそ、滞在中、度々懇切な対応を寄せられたのではなからうか。充真院はそれぞれの寺院と良き交流を紡ぎ、内藤家と三河の寺院との縁を再構築したのである。

さて、岡崎滞在中の充真院の思いについてふれておこう。充真院は知的な楽しみの一つとして短歌を詠む⁽³⁾。短歌は心情を集約した定型詩であり、充真院の思いを知る最適な素材である。五月五日に充真院は短歌を詠んだ。端午の節句の祝賀の日であるが、「あまり淋しく」と、たいへん寂しさを感じた⁽⁴⁾。生まれ育った大好きな江戸に戻るうれしい道中であり、一日も早く旅を再開したいのに、岡崎での足止めが思いのほか長引き、心細さをひしひしと感じたのである。しんみりとした心地が歌心を誘い、短歌を六首詠んだ。左に紹介しておこう。

旅衣さはりと成し公家と雨いつれかさきにはれて行らん
ひと日ふた日身を山寺のかくれ家と思はすけふはあやめふく軒
思はさる此山寺の旅まくらむかしのあとをとふかうれしき
いそかる、心を公家に岡崎のやとをはなれし山寺の夢

端午に夏きくのいとうるはしく咲たるを、けふの祝義旅中の慰にもと寺よりおくりこしければ

あやめにはあらて手入れし夏きくの花のさま／＼見るも珍らし

菖蒲酒の肴には大平ととんぶり

長き根のあやめにあらて夏きくも千とせをのふる花とこそみれ

右について簡単に解説しておこう。一首目は、旅の足止めとなった公家の通行と雨について、どちらが先に解消して旅を再開するこ

とができるだろうか、待ちくたびれた気持ち、二首目は西光寺で日々を重ねたところ、思いがけず端午の節句をここで迎えたことを詠んだ。三首目は、思いがけず西光寺で過ごし、内藤家の祖先らの所縁を体験できたことを嬉しく思う気持ちを詠んだ。これは内藤家の先祖らを大切に思い、行動してきた充真院ならではの心の現われでもある⁽⁶⁾。四首目は、江戸へ向かう旅を急いでいるが、公家の通行が因で西本陣中根家を離れて西光寺に滞在している現実、実に思いがけずまるで夢のようであるという。

五首目と六首目にはそれぞれ詞書がある。五首目の詞書には、端午の節句の祝儀として寺、すなわち信楽院から美しい夏菊の花が慰みとして届けられたと状況を説明したうえで、端午の節句の菖蒲ではなく、手入れをした様々な色の夏菊を珍しく眺めて楽しんだことを詠んだ。六首目は、詞書に菖蒲酒の肴として大平椀と井鉢に盛った物、すなわち端午の節句の祝いの膳を戴いたことを掲げたうえで、長い根の菖蒲ではないが、贈られた夏菊も、限りなく長い千歳もの年月を延ばす縁起の良い花であると祝賀の気持ちを寿いだ。

寂しさに誘発されて詠んだ短歌だが、旅の再開を待ちわびる心、内藤家と所縁のある寺院との思いがけない縁を感謝する気持ち、信楽院が夏菊を充真院に贈ってくれた心遣いをうれしく思う気持ちなど、思いを廻らせながら折々に感じた気持ちを実に素直に詠み込んでいる。端午の節句に充真院が詠んだ短歌であるが、足止めとなった岡崎での日々における様々な思いを窺い知ることができるのであ

る。

最後に、充真院の人物像に関してふれておこう。まず、充真院の好みとして今回新たに確認できた事項をあげておこう。まず、植物の好みだが、充真院は夏菊が好きであることが明らかになった。信楽院の庭で夏菊を見て、充真院にしては珍しく欲しいと希望を伝えたと、さらに滞在中に再度、信楽院から夏菊を贈られて、そのうれしさを短歌に詠んでいた。好きな花なので、短歌を詠みたくなる程うれしさが一人だったのである。

居室については、清潔さや建具の使い易さを好んだ。滞在先となった西光寺を訪れた際に、古い寺かと思ったが新築の書院に案内され、しかも部屋が極めて清潔であり、雨戸の建て付けも良い状態であることをたいへん喜んだ。日頃から整った部屋で生活している大名家の奥方ならではの感覚が窺いが知れた。

好み以外に新たに確認した点として、食べ物や女房言葉で表現する場合が見られることである。今回の検討で、お汁粉を「おゆるこ」、おかきを「あげかちん」と記していた。実は二年前の旅についてまとめた『五十三次ねむりの合の手』では、ぼたもちを「やわく」と表現していた。⁷⁾ 日常において女房言葉を使い、文語体としても用いたのである。

墓地の敷地の広さについての基準は、松平家の墓地を狭いと感じた様子から、実家井伊家と婚家内藤家の広い墓地が充真院の墓地の基準であることが窺い知れた。

人物像として、かつて拙著で指摘した事項を補強できる点も指摘

しておこう。まず、充真院は詳細な観察眼を有し、豊かで緻密な表現力の持ち主であることについてである。岡崎に足止めされた日々を、充真院が『海陸返り咲こと葉の手拍子』に動向、様子、気持ちなどを実に詳細にしたためたおかげで、具に知ることができた。とりわけ大樹寺参拝については、その様子を刻々と極めて克明に記した。かつて『五十三次ねむりの合の手』に詳細な記録と豊かな表現力が見出せることを指摘したが、その二年後の旅の紀行文も同様であった。充真院の観察力と文章表現力が健在であることが確認できた。⁸⁾

知的関心については、間取りに興味を寄せていること、美的感覚の傾向、古建築に無関心であることを補強しておきたい。充真院は間取りに寄せる興味はこの旅でも同様で、岡崎では西光寺で充真院と御付の女性たちが使用した書院を一階、二階供も良く観察して、間取り図を描いた。

美的感覚については華美を好まない、特に煌びやかさを好まない点が、將軍の間の襖絵を見た際の感想にも共通しており、充真院の美的感性として追認できた。⁹⁾

充真院が古建築に興味が無い点も事例の補強ができた。それは、大樹寺の多宝塔に一言もふれていないことである。天文四年（一五三五）建立した、立派な多宝塔が山門の西側にある。¹⁰⁾ 当寺を訪れると、必ず目に入る建造物である。それにも拘わらず、充真院が多宝

塔について全く記載していないのは、古い建物を粗末に感じるからであろう。それは、惣門を見た時に立派ではないと感じたことと共通する。充真院は古色を帯びた建物に、魅力を感じないのである。

これは、文久三年の江戸から延岡への転居の旅の途中に石山寺に参拝した折に、多宝塔についての記述が全くなかったこと、挿絵の中に描いてはいたものの、形状が正確でなかったこと、すなわち関心がないので記憶があやふやであったことと一致する⁽¹¹⁾。

健康面については、大樹寺の御霊屋と貫木神を参拝した際に、視力の弱さについて記載しており、年齢相応の視力の低下が続いている様子がここでも窺えた⁽¹²⁾。

- (1) 前掲拙著、三二頁。
- (2) 充真院が教養豊かな人物であることについては、前掲拙著の二〇一～二頁。
- (3) 前掲拙著、一八七～九一頁。二〇一頁。
- (4) 明大翻刻本、一六二頁。後掲する短歌も同頁。
- (5) 元治二年の旅が充真院にとって江戸に戻るうれしい旅であることに ついては、前掲拙著、四二頁。
- (6) 充真院が内藤家の先祖に寄せる思いと行動については、前掲拙著、三一～三頁。
- (7) 明大翻刻本、一〇頁。
- (8) 前掲拙著、一一九～二〇頁。
- (9) 煌びやかさを好まない点については、前掲拙著、一八二頁。
- (10) 多宝塔は現在、重要文化財に指定されている(『大樹寺の歴史』九三頁)。

(11) 前掲拙著、四一頁。

(12) 年齢相応の視力の低下については、前掲拙稿、一四五頁。

付記

論文作成のための史料調査の折に、岡崎市美術博物館の学芸員湯谷翔悟氏が史料閲覧の便宜を計って下さり、さらに大樹寺、西光寺、西本陣中根家跡に案内して下さいました。大樹寺の野村顕弘氏、西光寺住職の成田敏嗣氏には寺内を案内していただいた。ここに厚くお礼を申しあげたい。なお、寄託史料の閲覧に快諾して下さいました大樹寺、西光寺に深謝の意を表する次第である。

Visit to Daiju-ji Temple by Naito Jushin-in of Nobeoka Domain, Hyuga Province

Naomi KANZAKI

Abstract

This paper is about Naito Jushin-in's visit to Daiju-ji Temple in Mikawa Province (present-day Okazaki-shi, Aichi-ken). This visit was on May 2, 1865 when Jushin-in was at age 66, in the course of her moving from Nobeoka to Edo. Daiju-ji Temple is where the successive Tokugawa shoguns' memorial tablets are enshrined. And in its sub-temple named Shinkyoin, those of Yoshikiyo Naito and his wife are enshrined.

Okazaki is the place where the Naito family was based before becoming a daimyo. Furthermore, the Nakane family, who managed the Nishi honjin, were formerly samurai and relatives of the Naito family when they were in Okazaki. Although Jushin-in originally planned to stay at the Nakane family's place; learning court nobles were on their way to Okazaki, she hesitated to stay at the Nishi honjin and stayed at Saiko-ji Temple instead. Saiko-ji Temple is the place related to the Naito family where Yoshikiyo Naito, the founder of the family, and his wife's were buried. During Jushin-in's stay at Saiko-ji Temple for a while, she visited Daiju-ji Temple. At Daiju-ji Temple, she paid reverence at the mausoleums of the first shogun, Ieyasu and the second, Hidetada Tokunaga, saw wall and sliding screen paintings by Tamechika Reizei in the ohojo (large abbot's chamber), and paid reverence at Kannuki-shin which had some connection with Ieyasu Tokunaga. At Shinkyoin, she prayed to the memorial tablets of Kiyoshige Naito and his wife. She made her visit to Daiju-ji Temple first and then to the grave of Kiyoshige Naito and his wife.

Until Naito Jushin-in visited this place, nobody from the Naito clan, neither kenin nor family, had visited there for a long time. Jushin-in's visit to Daiju-ji Temple and stay at Saiko-ji Temple renewed the intimate relationship between the Naito family and these temples.